

東日本大震災から4年

宮城県・福島県の障害者雇用

職場
ルポ

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災から丸4年を迎え、障害者が働く宮城県と福島県の企業を訪ねた。新陽ランドリーは震災前の状態にほぼ戻り、サンエイ海苔は原発事故の先が見えないなか、環境に「順応」して新たな道を歩み出している。



病院ユニフォーム
専用工場



新陽ランドリー泉工場

取材先データ

株式会社新陽ランドリー

本社：〒984-0001 宮城県仙台市若林区鶴代町6-48-6 TEL 022-236-4647
泉工場：〒981-3221 宮城県仙台市泉区根白石字判在家25-2 TEL 022-376-5511
<http://sinyo.main.jp>

■代表取締役：加藤 幹夫 ■創業：昭和29年10月1日

■設立：1964（昭和39）年12月1日

■事業内容：病院ユニフォーム・寝具・食品工場のユニフォームのクリーニング、リネンサプライ・ユニフォームのレンタル、繊維製品・ユニフォームの販売

新たな一歩が始まった

新陽ランドリーは、本社（若林区）と泉工場（泉区）が東日本大震災の被害を受けた。その数カ月後、社長の加藤幹夫さんから、震災後の困難な状況を障害者とともに乗り越えた体験をうかがった（本誌2011年7月号）。今回訪ねた泉工場は、仙台市街から北西方向に車で30分ほど、民家が散在する畑の中にある。工場の階段の壁などの亀裂はそのまま残っている。

「エレベーターは修理しましたが、壁は崩れなければ危なくないので、大地震のことを忘れないようにそのままにしているのです。機械はかなり入れ替え、本社のトイレは昨年、直しました。蓄えていたお金を使ったので、2014年5月末決算でようやく黒字になりました。売上や利益が元に戻り、会社もやっと落ち着いて、スタートに戻ったという感じです。従業員も採用できるようになりました。これから銀行からの借入れを頑張つて返そうと思います」

創業は1954（昭和29）年。病院の寝具・ユニフォームのクリーニングがメインで、泉工場近くに病院ユニフォーム専用工場があり、300床以上の大病院から仕事

（文）清原れい子 （写真）小山博孝

keyword: 精神障害、知的障害、障害者授産施設、就労支援事業所、クリーニング業、食品製造・加工業

POINT

- ① 安心が連帯を強める
- ② グループワークで情報共有
- ③ 施設外就労を活用



工場の階段、壁に残る地震の爪あと



新陽ランドリー加藤幹夫社長



を受注している。震災時より従業員は少し増え、現在67人。そのうち障害者は41人（身体障害者4人、知的障害者36人、精神障害者1人）で、泉工場と病院ユニフォーム工場では28人が働く。ジョブコーチの



余暇活動を楽しみに、仕事に励む

存在である指導員10人が障害者たちをサポートしている。

加藤さんが知的障害者を雇ったのは、父親が急逝し、社長を継いだ20代のことだった。「新工場を作ったとき、母に『障害者を雇うのは当たり前』といわれましたし、周囲がみな年上だったので、若かった私には大変でした。知的障害者とは学校の先生と生徒のようで楽しかったです」

知的障害者の雇用を始めて30年余。20人が会社隣の寮で暮らし、社長一家も一緒に住んでいる。知的障害者たちは、休日に仙台の繁華街までバスと地下鉄に乗って買い物に出かけたり、バスケットボールの練習をしたり、時には社長が映画に連れていったりと、レクリエーションが盛りだくさ



ユニフォームのアイロンがけを担当する伊東一絵さん、若林区の自宅は、津波で流された

ん。その日常は、社長には「当たり前のこと」だそうだ。

「知的障害者にもさまざまな経験をさせたい。お誕生日会、クリスマス、バレンタインデーなど、従業員同士のプレゼント交換が盛んです。私は大変ですが、楽しいですよ。夕食の献立は自分たちで決めていきますし、お小遣いで月に3〜4万円使ってもらいます」

小学生のころから障害者と暮らしてきた息子の加藤幹太郎さんも自然体。最近、寮の管理や福祉サービスを行う会社を立ち上げた。加藤社長は、障害者は地域にも受け入れられているという。

「地域の方たちにはよくしてもらっています。農作物をもらったり、稲刈りをしたり、地域のお祭りに参加すると歓迎されます。30数年働いている人たちの老後を考えて、これからグループホームを作りたくて、定年退職しても年金で暮らしていけるといいうのがポリシーです」

新陽ランドリーのバスケットボールのチームは、かつて東北・北海道ブロックのチャンピオンだったが、秋田県のチームに王座を譲ったとか。取材の日、勤務が休みで買い物に出かけていた木村はるみさんは日本でトップクラスの卓球選手で、シドニー・パラリンピックから活躍し、仁川のアジアパラリンピックにも出場した。「卓球は、キャリアを積むほど、知的障害の部分を超える競技。午前中は仕事、午後は東



菅原ひろみ指導員



卓球の指導にもあたる松田亜由美さん

北福祉大学の卓球部で練習する選手です」と加藤さん。

「もっと強くなるには、そばにコーチがつくことが必要」とのアドバイスを受け、東北福祉大卓球部のキャプテンだった松田亜由美さんを指導員としてスカウト。松田さんは、アジアパラリンピックの卓球の知的障害女子部門の監督を務めた。「福祉の勉強はしていたので、仕事に興味はありません。木村さんはまだまだ伸びると思います」

「安心感」が団結力に

指導員の菅原ひろみさんは1998年から勤務する。サービス管理責任者、障害者職業生活相談員の資格を持ち、いまは実家のある栗原市から車で1時間半かけて通勤している。「これまで一緒に働いてきたみんなと震災後も働き続けたいという思いが一番です。この仕事を頑張ると、この楽しみが待っているという感じ

で、私たちも一緒に余暇活動を楽しみながら、仕事を頑張っています。仕事が楽しいと思えるようにお手伝いできればと思います」

障害者の人たちは勤続年数が長く、ベテランが多い。何か困ったときに支援するところが、指導員の役目だそう。

「できることはすぐくほめる、できないことはもうちょっと頑張ってみようとか、やり方を変えたりして、1人ひとりに合わせて、できることを増やしてきました。できることが増えて本人の自信につながるようになって考えています」

震災後は、よく声かけをするようになったという。

「少しでも揺れると不安になる人は、すぐ近くに寄り添える人がいると安心できると思います。障害のある人たちは、安心感が団結につながるのではないかと思います。団結力は強まりましたね。安全と安心を第一に、日頃から安全を確認しながら逃げる練習をしたり、危なくなったらこうしようねと話をしています」

「リスク管理」は、 「すぎることはない」

加藤社長も、震災が従業員の連帯感を強めたと考えている。

「格好よくいうと会社の連帯感。会社は1つだなと思いました。同じ方向を向いてみんな頑張っていると再認識できたのが一

番大きいです。うちはクリスマス会などの余暇があつてこそその会社なのですが、まともがさらに強くなりました」

震災の経験から他企業へメッセージを送る。

「リスク管理は大事です。準備していたとはいえ、危険度チェックは甘かったと思います。私は出かけていて、工場は大丈夫だと思っていたのですが、蒸気が吹きあがり、天井を突き破ってブロックが落ちました。従業員は毛布をかぶって、トレイニングどおり外に避難していましたが、雪が降ってきて寒かった。特に知的障害の人は愛社精神があり、一生懸命頑張ってくれて、本当に力になりました」

幸い、倒れなかった中2階の5トンタンクを1階に移し、工場内を再点検した。震災を機に考えを改めたこともある。

「障害者もグループワークで情報共有をしていないと、だれかが休むと仕事がスムーズにいかなくなると思いました。障害者は長く働いているので、『この仕事は自分の担当だ』という意識がありますが、能力のある人ほど同じ仕事を続けると飽きてくるので、人事異動は刺激があつていいのではと思います。震災がなければよかったです。震災がなかったら、震災は、会社と人を考えるチャンスになったと思います」

このように、前向きに新たな一歩を歩み出している。